

評者: 芹沢 俊介

パキスタン北部の山岳地帯にある町ペシャワール

パキスタン北部の山岳地帯に或町ペシャワール、この地名が世界認識を根底から変えるほどの意味を帯びて私たちに迫ってきたのは、中村哲の本によってである。著者はペシャワール会の医者として、二十年にわたり現地で、ハンセン病コントロール計画をはじめとする医療活動に従事する一方、大干ばつにみまわられてアフガニスタンに数多くの井戸を掘ってきた。現地の人たちとともに、農民が土地を失って難民となる実態を防ごうとして懸命の努力を続けてきた。

素朴な疑問が浮かんでこよう。なぜパキスタンの町がアフガン復興の拠点となるのだろうか。著者は書いている。浮浪者、物乞い、泥棒、そして三百万人のアフガン難民たちを、ペシャワールは苦もなく受けいれると。著者はそうした姿に、著者のいう「平和・相互扶助の精神」を見たのだ。そこそが真の人類共通の文化遺産であると思ったに違いない。あの悪名高かったタリバン政権に關しても、現地の生活者の視点に立つとまったく違う像が描きだされる。著者の目には、タリバンによる治安回復は驚くべきで、人々はおおむねこれを歓迎していたと映った。アフガニスタンの広大な国土の九割が、兵力わずか二万人のタリバン政権で支配され続けたのは、決して圧政のためではなく、世界でもっとも保守的なイスラム社会の住民たちの期待に応えたから、と著者は述べる。

このような著者の目を通して見るとき、正義の米国対悪のタリバンという構図は虚偽であり、タリバン後の自由なアフガンという見通しもまるで根拠のない、非現実的なものだということがわかる。実際タリバン政権崩壊後、治安は乱れ、貧しい人々の生活はいっそう悪化している。復興支援という名の西欧風の押しつけも完全に行き詰まっている。そうした現実をかたわらに、長期的展望に立つ著者はめげる気配もない。

誇り高いアフガン気質は農村にこそ生きているという現実感覚を踏まえ、年間二十万人を診察するという医療活動や、井戸掘りなど水源確保を目的とした作業地の拡大に尽くしている。農村復興の要がそこにあるというのだ。読後、人間愛についてつくづく考えこんでしまった。

